えびす
NISHINOMIYA EBISU
平成16年　新春号

西宮えびす平成16年新春号（通巻第20号）　平成15年12月1日発行
発行／西宮神社　〒662-0974　兵庫県西宮市社家町1-17　TEL0798-33-0321　FAX0798-33-5355

編集／総務課広報　印刷／小西印刷所

EBISU SCOPE

エビススコープ

星野阪神タイガース優勝奉告祭

他球団の追随を許さぬ強さで勝ち進み、九月十五日に甲子園球場で十八年ぶりのセントラルリーグ優勝を決めた阪神タイガース。日本シリーズの余韻醒めやらぬ十月二十九日午前十時に球団役員を始め、星野監督・桧山選手・今岡選手参列のもと、御本殿において優勝奉告祭が執り行われ、宮司祝詞奏上の後、久万オーナー、野崎球団社長、星野監督が玉串を捧げて感謝の意を表しました。

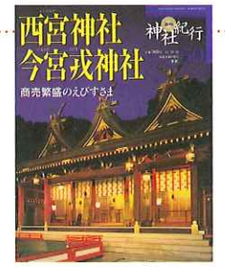
春の必勝祈願祭とは異なり、背広姿での参拝ではありましたが、特に既に引退を発表していた星野監督には、大勢のファンから「ありがとう」の声援がかけられ、笑顔で手を振って応えていました。

日本一の夢を自分のものとせず、次期岡田監督にその夢を残して引退したのもまた星野監督らしさでしょうか。

全国を大いに盛り上げ楽しませてくれた今年のタイガースの闘いぶりは、地元の西宮はもとより関西の人々には野球ファンならずとも活気を肌に感じ、夢と希望を与えてくれました。

神社紀行

平成十四年十月より毎週全国の神社を紹介されていた、学研『週刊　神社紀行』第五十巻に当社と今宮戎神社が特集されました。大変、美しい写真と共に両宮の詳しい説明などが掲載されております。



※お近くの書店でご購入下さい。
（税込560円）

神池浄化

近年、拝殿前神池の水が汚れ浄化に苦慮していたのですが此度、（株）加藤電機製作所に依頼浄化装置を設置することになりました。

池の中に水流をつくり、凝集剤・沈降剤を全体的に行き渡らせることにより汚濁物質は固まって池の底に沈み、投入した天然バクテリアが水の濁りや臭いのもとを分解します。見違えるほどきれいになった神池には今まで気がつかなかった生き物がたくさん生息しているのが見られます。

十日えびすの時はお店に囲まれて入ることはできませんが一度、静かなときにでもおこし頂いてご覧下さい。

INFORMATION
お知らせ

■十日えびす交通規制のお知らせ

西宮警察署は一月九日から一月十一日までの三日間、午前九時から午後十二時まで神社周辺を車両通行止めにし、歩行者専用道路にします。

神社周辺には駐車場がありませんので公共交通機関をご利用ください。

◆阪神電車　阪神本線
西宮駅下車500メートル

◆阪急電車　神戸線
夙川駅下車900メートル

◆JR神戸線
西ノ宮駅下車
1.2キロメートル

◎阪急西宮北口駅・JR西ノ宮駅から臨時バス増発

■入講のご案内

阪神間の中心地・西宮にありながら緑深いえびすの森に鎮まる西宮神社は、福の神総本社として古来より親しまれてきました。その御神徳は、全国津々浦々にまで広がり、各地で「えびす講」が作られてきました。当社では、これらをまとめて、どなた様でも入っていただける「日供講社」と「本えびす講社」として運営を致しております。

日供講社　神前に朝夕のお供えとお誕生日にご祈祷を致します。
講金年額　五、〇〇〇円

本えびす講社　西宮神社の崇敬会、講員の皆様の日頃のご守護を致します。
講金年額
正講員　一、〇〇〇円より
梅講員　五、〇〇〇円〃
竹講員　一〇、〇〇〇円〃
松講員　三〇、〇〇〇円〃

編集室から

表紙の絵柄は「掛鯛」を水引で摸したものです。

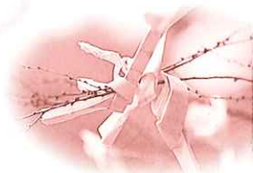
「掛鯛」とは、お正月や祭礼の吉事の折に二尾の鯛を結び、神前に掛けて奉納したもので、江戸時代より各地で広く行なわれていました。

鯛と縁の深い当社におきましても、文化五年（1808）に兵庫津（神戸）の乾物問屋より「御本社御掛鯛」が奉献されており、その後は尼崎魚問屋より毎年、大鯛三掛、中鯛四掛の「掛鯛」が明治まで献上されておりました。

今では見る事の出来なくなった風習ですが、当社では古式に習い再興をしてみようと考えております。「掛鯛」に関する情報を御存知の方は、参考の為にも是非とも編集室まで御一報ください。（希）

年頭にあたり

西宮神社宮司　吉井　良隆



新年明けましておめでとうございます。

謹んで皇室の弥栄と国家の安泰を祈念申し上げます。

「明けましておめでとう」

新年の挨拶としてすばらしい言葉であり、簡にして深い意義がある。柳田国男先生以来、この言葉は、子供から親に向かって言う元日の祝い言葉であった、と理解されてきた。即ち「年籠りの明けた年頭にあたり、親の霊魂に向かって子供が、円満な充実を願って発する、祝福の褒め言葉なのである。その言葉の力でこの一年間、両親は元気に健康を保って家族の為に働くことができると考えたのである。これは古い「親拝み」の習俗である、大変情味あふれる、心あたたまる民俗であり、理屈でもない、さりとて、決しておしつけがましいことでもない、ごく自然に私たちの先祖の生活の中に培われてきた信仰であり、礼儀であった。孝行といった儒教的道徳観の入ってくる以前に、日本人の家の生活の中に、ちゃんと道徳の心を養う場を備えていたのである。」と述べておられる。今日のような殺伐な社会の中にあって、まず年頭に当たり十分吟味すべき言葉である。日本独特の言霊（ことだま）信仰というべきであろう。

さて、昨年の後半にはスポーツ界において阪神タイガースが十八年ぶりにセ・リーグの優勝をなしとげ、地元は勿論のこと関西一円の阪神ファンの熱狂ぶりは、やや沈滞気味であった社会に一時的ではあるがすばらしい活力を与え、明るい話題を提供した。阪神タイガースの守護神である当社では、毎年開幕直前に必勝祈願祭を執り行い、本年は惜しくも日本シリーズの優勝を逸したとはいえ、報恩感謝の気持ちをもってセ・リーグ優勝奉告祭を行い、めでたく締めくくることのできたことは、久々にすがすがしい気持ちを持つことができた。

今年は何といっても大きなイベント、オリンピック開催の年であり、しかもギリシャ文明の発祥地アテネで行われるのであり、これ又日本のスポーツ界を始め国民挙って大いに湧き上がることであろう。

十日えびす

新春初詣

百太夫神社祭 ●一月一日～三日

えびす信仰を全国に広めた傀儡師（人形遣い）の祖神を崇めるお祭り。この傀儡師の人形操りが淡路人形浄瑠璃や大阪文楽の源流といわれています。祭典に引き続き徳島から「阿波木偶箱廻し」の奉納がおこなわれます。

大マグロ奉納 ●一月八日（木）午前九時

十日えびすを前に神戸市東部水産物卸売協同組合などから約三百キロの特大の本マグロが奉納されます。奉納された特大マグロは、「招福マグロ」として拝殿に献備されます。近年このマグロに硬貨を貼り付けて願を掛けることがブームとなっています。

有馬温泉献湯式 ●一月九日（金）午後二時

関西の奥座敷である有馬温泉より角樽に詰めて運ばれて来た「金泉」と呼ばれる名湯を桶に移した後、湯女に扮した芸妓さんが湯もみ太鼓のはやしに合わせて湯もみを行ない、適温になったお湯と湯文を神前に奉納します。

開門神事福男選び ●一月十日（土）午前六時

忌籠神事のために九日の深夜十二時に閉じられた表大門（赤門）が十日午前六時に開かれると、外で待ち構えた参拝者が約一百メートル離れた本殿への一番参りを競います。本殿に早く到着した順に一番から三番までがその年の福男として認証され、特別賞品が授けられます。

残り福 ●一月十一日（日）

年の始めに商売繁盛や家内安全を願うお祭り十日えびす。阪神間における最大の祭典として広く全国にも知られ、百万人をこえる人々で賑わいます。

「残り物には福がある」九、十、十一日、三日間にわたり行われる十日えびす大祭最後の日、残り福を求め前日、前々日にも増し多くの参拝者がおとずれます。

平成十六年

年中行事

毎年恒例、八十二の祭典のほか、日毎月毎に多くの祭典が執りおこなわれております。今回はその中の主たる祭典の一部をご紹介いたします。

一月

一月一日【歳旦祭】
五日【百太夫神社祭】
八日【大マグロ奉納式】
九日【宵えびす】
十日【本えびす 十日えびす大祭】
十一日【残り福】

二月

節分の日【節分祭】
十七日【祈年祭】
初午の日【神明神社・初午祭】

五月

五月一～六、十日【太々神楽祭】

六月

六月十四日【御輿屋祭】
三十日【大祓式・茅輪くぐり神事】

七月

七月十四日【末社住吉神社例祭】
二十日【夏祭・えびす萬燈籠】
三十一日【末社住吉神社夏祭】

九月

中秋の名月の日【観月祭】
九月二十一～二十三日【例祭（西宮まつり）】
【西宮酒蔵ルネサンス】

十月

十月 第一週土日【宮水まつり】

十一月

十一月二十日【誓文祭】
二十三日【新嘗祭】

十二月

十二月三十一日【大祓式・除夜祭】

■この他 毎日 朝夕 日供祭 誕生祭

毎月の一、十、二十日午前十時より崇敬者の方々の平安をお祈りする旬祭（月次祭）を斉行いたしますので皆様のご参列をお待ちしております。

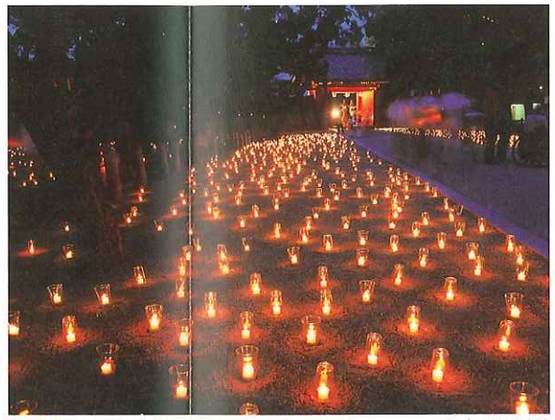
西宮まつり

宮水行列

観月祭

誓文祭

宮水 原水


万灯籠祭

写真：登野城弘

夏祭り 湯立神楽

神楽祭 特別展示
（左甚五郎：作「えびす像」）

【神楽祭】

太々神楽祭とは、当社の崇敬の為に本社並びに各地に組織されている講社の人々が年に一度本社に集い、えびす大神様の御前で神楽を奏しお慰めすると共にその御神徳を代々にわたりお受けするものです。

【おこしや祭】

えびす様が現在の鎮座地へお越しになられる途中、居眠りをされたので、おしりをひねった事から別名を「尻ひねりまつり」と呼ばれておりました。当日は時季の果物びわを手にしたびわ娘が神輿のお供をしおこしや跡地でびわをおくばりします。

【夏越の大祓】

知らず知らずのうちに身についた厄を六月と十二月の末日に行われる大祓式で祓い清めます。

【夏祭・えびす萬燈籠】

拝殿前にて巫女による暑気払いの湯立て神楽が奉納されます。夕刻よりはえびす萬燈籠祭が斎行され境内外の石燈籠約三〇〇基をはじめとしてローソク燈籠一万個あまりに点火され夏祭りの賑わいと共に夜の境内を美しく、そして神秘的な世界につくりあげます。

【観月祭】

中秋の名月本殿前舞台において観月祭が厳かに斎行されます。祭典では斎主の祝詞に続き原笙会が女人舞楽を奉納その後、神社会館に場を移し晩餐会が開催されます。

【宮水まつり】

宮水娘が宮水発祥の井戸から汲み上げた宮水をお供えして神事が行われた後、宮水を時代装束を身にまとった人らが西宮神社まで運び醸造成功を祈願します。

【酒蔵ルネサンス】

西宮の水・酒・名産品と伝統文化を発信するということで特設舞台での各種イベントや酒造メーカーまた地元企業での試飲や販売などが行われます。

【誓文祭】

新春のお願い事に対して秋には感謝のお祭りをします。これを誓文祭といい、百貨店や昔ながらの商家で行われているせいもん払いやえびす講という行事がその名残です。当社では正月・初詣・十日えびす大祭にお願いなさいましたことに対しての感謝の祭典としております。

諸国探訪……②

新潟県配札関係者懇親会（十月十一日）

只今、当社では全国各地でえびす様の御神影札をお配り頂いております配札係の方々をお尋ね致し、今後のあり方についてご相談申し上げております。訪問の終わりました地域につきましては、地域毎に現地にお集まり頂き、本社より宮司が参上、長年に亘るご労苦に感謝致しますと共に横の繋がりを深め、将来的には組織的な纏まりにしていきたいと考えております。

その初めての試みと致しまして、去る十月十一日新潟市におきまして新潟県の配札関係者の方々にお集まり頂きまして懇親会を開催しました。

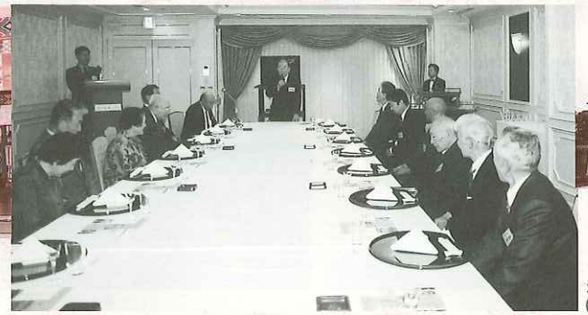
当日は県内の十六関係団体の内から九団体十二名、本社より宮司以下四名の職員が出席。まず新潟総鎮守・白山神社へ正式参拝、小林宮司様より鄭重なる社頭説明を頂きました。その後、会場をホテルオークラ新潟に移し、本社吉井宮司と水原西宮神社佐藤正吾氏による代表挨拶に続き本社宮司による「えびす信仰の広がり」と題しての講話、佐渡講社梅澤玄富氏による乾杯の発声で懇親会に入りました。

白山神社正式参拝の後、小林宮司様と共に

会食の傍ら全国各地でのえびす信仰の様子を撮影したビデオを見たり、参会者の自己紹介が行なわれました。

参集の方々からは、自動車がなかった時代に泊り掛けで雪の中を一軒一軒廻ったり、家族が協力し合って江戸時代から続く配札活動を今日まで支えてこられたご苦労をお伺いすると共に世代交代等による減体傾向に対処すべく、地元の配札者が連携を深め、本社と協力して教化活動を推進していくことが話し合われました。

白山神社正式参拝・神楽奉奏


本社宮司を囲んでの懇親会
（於ホテルオークラ新潟）

新潟総鎮守・白山神社

柏崎市・堀越勝哉氏

水原西宮神社・佐藤正吾氏

正光寺・長尾恵淳氏

三条市・今井賢哉氏

須門神社・仲丸宣弘氏

大切に守ってこられた古文書類

佐渡西宮講社・梅澤玄富氏

村上市・波口彦三郎氏、ミヤコ氏

黒川西宮神社・萩原重雄氏、節氏

十日町西宮神社・蕪木栄次郎氏、南雲等氏

海へのいのり——江戸期の社用日誌より

京都から西国街道を進んで、初めて海に出会うところが西宮の浜である。山に囲まれた京都に住まいする人達にとってこの西宮は、陽光がまばゆいほどに海面にきらめく町、また江戸や西国方面に直結する船の出入りする実に開放感溢れる町であった。

江戸時代も後期の天保年間には、齢六十を越え宮仕えも終えたある公家が、海を見たいという念願を西宮で果たしたという記事がある。この時はわずか二泊二日の短い旅行であったが、当社神主の案内で西宮の沖に停泊中の千石船や浜に立ち並ぶ酒蔵を御覧になり、また小舟ではぜ釣りを楽しまれたり「秋之魚類等」を召し上がったりと海辺の一日を満喫された。

灯篭に刻まれた奉納者名或いはご開帳を始め各祭典への初尾の奉納仲を見ても、干鰯仲・渡海仲・廻船仲・小舟仲等海と関わりの深い職業が多く見られる。この内で漁業を営む網中が願主となっての「濱祭」が江戸中期以降継続して執行されていた。

尤も元文年間より延享年間（1736～1747）頃は、西宮社の本社にあたる廣田社で九月十六日に行われた廻船支配中・渡海仲間による船玉御神事と平行して八月十日に廣田西宮南宮の三社の御神前で大漁繁昌の濱祭が行われていた。

その後宝暦十三年（1763）になると浜に拝所が設けられ、初めて濱祭（浦祭）が行われてからちょうど四十年後の安永四年（1775）にはこの浜への神輿の御神幸があり、

①港湾事業としての築洲成就祈祷（於札場之濱）
②当所の繁栄・大漁繁昌祈願（於東濱之仮殿）
③同右（於西宮南宮沖御社の三社前）

以上三ケ所でそれぞれの祭が斎行された。文化年間に入ると更に祈願を重ね、東濱の金比羅社（現在、当社摂社住吉神社に合祀）に参向（中臣祓壱反）することそして濱仮殿での御祈祷後、更に浜に設けられた鳥居先にて大海原を拝しての御祈祷が加えられた。

また、この時の御札は竹に挟んで願主に渡すという慣わしで、御神号を記し「海色」で後に海上へ入れるものであったようだ。当社の濱祭は近隣にも広く知れ渡っていたようで、播州二見浦や淡路岩屋浦から依頼がありそれぞれの地へ行き同祭を行った記録もある。

一方、西宮を離れ江戸の魚河岸で活躍した者もいた。江戸の魚河岸は家康公の関係より摂津の佃の漁師である森一族によって開かれたが、その後上方の漁業関係者が江戸へ下り本船町や小網町で魚問屋として家業に勤しんだ。その中でも「西宮氏」の活躍が目を引く。特に魚問屋中で幕府への納魚を取り仕切る四人の請負人の一人に西宮甚左衛門なる人物がいた。また寛保三年（1743）に「江戸太々神楽講」より当社に奉納された石灯篭に刻まれた奉納者の一人に西宮清左衛門がいる。彼は三年後に厚い崇敬心より下総の宅地に当社恵美酒大神を勧請したのであった。江戸の西宮出身者は、新川周辺の酒屋仲関係と日本橋周辺の魚問屋仲関係と二つのグループがあり、特に魚問屋仲では毎年代参で四月二十日の江戸太々神楽祭に本社参拝を行い、海上安全、大漁満足を祈願していた。

このように地理的にも歴史的にも海と深い関わりを持つ西宮、そしてそこに住む者たちの海への篤いいのりが御前の浜前の海上に捧げられてきた。

今は大規模な埋立地が出来、海の景色を所望した公家が秋の一日を楽しんだ西宮の海の様子とは一変したが、秋九月二十三日の海上渡御祭を前に埋立地の先端で遥かに茅渟の海原を望んでのお旅所祭で、海への篤いいのりが平成の世でも引き継がれているのである。

御前浜